

リレーコラム ワールドディリーサミットを 振り返る

登録された参加者は 56 カ国の 2106 人。このうち 700 人以上が海外からの来訪者であった。22 年ぶりに日本に招致されたワールドディリーサミットは、当初の見込みをはるかに上回るスケールで、文字どおりのビッグ・イベントとなった。想定を超えて増加する事前登録にうれしい悲鳴が上がり、会場の座席が足りないため、近隣のホテルの大会議室を急遽確保するなどというひと幕もあった。これなどはひとつの例で、おそらくは大小さまざまな苦労があったに違いない。大会の準備と期間中の運営を支えた酪農・乳業関係者の皆さんにあらためて敬意を表したい。

サミットの会議や併行して企画された集いなどについて、その概要はすでに本誌 548 号に紹介されている。また、会議の詳細な報告書も準備されているとのことで、中身の紹介はそちらに譲る。というわけで、今回は個人的な印象を二・三拾い上げて、気楽に書かせていただくことにする。

私自身はサミットの前半に集中的に参加した。それも経済や政策あるいは食文化など、もっぱら人文社会科学系の講演会を聴講した。具体的にはディリーリーダーズフォーラムと酪農政策・経済特別講演会のもとに設けられた三つのセッションである。このうちリーダーズフォーラムではテトラパック CEO のデニス・ヨンセンさんとペアで、また、特別講演会セッション 3 ではイギリス農業者連盟・酪農部会長のマンセル・レイモンドさんとペアで、モデレーターを務めさせていただいた。

これは私だけかもしれないが、司会役を仰せつかった会議の内容については、意外に頭に残っていない。もちろん、発表者の話には耳を傾ける。かなり集中しているつもりである。けれども同時に、プレゼンテーションへのコメントや質問を考えたりもするし、スケジュールどおりに進行しているかどうかにも気になる。というわけで、あとから振り返って記憶が断片的であることが多い。今回も、最近になって先ほど紹介した詳細報告の草稿に目を通して、たしかにそんな議論もあったなど、記憶の希薄な部分を補った上でこの小文を書き始めた。

リーダーズフォーラムは、その名のとおり酪農・乳業のトップによる講演会であり、乳製品の行き交う市場の存在がプレゼンテーションの前提となっていた。特徴的だったのは、国や地域を成熟市場 matured market と新興市場 emerging market に大別し、それぞれに課題や挑戦のあるという認識がほぼ共有されていた点である。中国からの講演は新興市場を代表していたし、日本の浅野茂太郎さんの講演からは、半世紀ほどの短期間で新興段階から成熟段階に移行した貴重な経験を学び取ることができた。そして、しかし、それだけで終わらなかったところに今回のフォーラムの持ち味があったように思う。

フォーラムの会場を埋めた多くの人々は、成熟市場と新興市場に加えて、新興市場以前の段階にある途上国の食料事情にも思いを馳せることになった。この点については、フォーラムの解題を兼ねたヨンセンさんの冒頭の講演によるところが大きかった。8 億 7 千万人の栄養不足人口に触れながら、フードセキュリティつまり十分な食料と栄養素の確保に向けて、乳製品が果たしうる貢献について明確に指摘されたからである。これを受けて私自身も総括のスピーチでは、乳製品の重要性を念頭に、もっぱらカロリー摂取量を基準とする栄養不足人口の推計の持つ限界にも言及させていただいた。カロリー以外の要素について栄養不足がありうる点は、推計を行っている当の国連食糧農業機関 (FAO) も認識している。

先進国の酪農界もそれぞれに苦労を重ねていることがよく伝わってきた。なかでも市場の



生源寺 眞一 (しょうげんじ しんいち)
名古屋大学大学院 教授

振れが大きくなったことへの懸念と対策の重要性について、繰り返し強調されていた点が印象的であった。具体的には酪農政策・経済のセッションで、それぞれの立場から乳製品の国際市場の変動性の高まりが指摘された。気まぐれといった意味のある volatility という単語が使われていたことも記憶に残っている。

政策の転換によって懸念が増幅されている面もある。ドイツなどの報告が指摘したように、EUの生乳生産調整が2015年に廃止されることで、域内の乳価は新たな変動のステージに移行すると見込まれている。乳価だけではない。これは日本の酪農にとっても深刻な問題であるが、飼料穀物の価格にも複数の報告者が言及していた。FAOの月別データなどで確認できるが、世界の食料市場は潮目が変わったと言ってよい。価格の変動幅が拡大するだけでなく、長期のトレンドとしても、需給がバランスする価格水準はじわりじわりと上昇する傾向を見せている。

酪農界の苦労という点では、もうひとつ印象的なプレゼンテーションがあった。それはオーストラリアからの報告である。持ち時間のほとんどすべてが、今世紀に入ってオーストラリアを連続的に襲った干ばつや洪水などの気象災害の影響に費やされた。私自身、かつて訪問した米の生産地帯の甚大な損害に関して多少の情報を得ていたが、酪農への深刻な影響については認識を新たにされた次第である。気象災害も加わって、オーストラリアの酪農家がかなりのペースで減少してきたことも紹介された。けれどもそのうえで強調されたのは、「残った酪農家は強靱だ」という信念であった。このひとつも参加者の脳裏に深く刻み込まれたのではないか。

日本で開催されたこともあって、サミットにはアジアからの参加者が目立った。酪農政策・経済のセッションでも、お隣の中国や韓国のほかにタイやインドネシア、さらにはモンゴルやトルコからの講演も行われた。1人当たりの所得水準からすると、韓国を除いて先進国への道のりはまだまだ遠い。けれども報告や質疑を通じて、それぞれに乳製品を活かした独特の食文化が根付いていることも確認された。とくにトルコやモンゴルの伝統的な乳製品の話題は、各国の食文化にそれなりに知識のある参加者層にも新鮮だったようである。

乳製品の利用には国や地域による違いがある。もちろん長い年月を経ることで、次第に利用形態に違いが現れることはあるし、何よりも消費の総量にも変化が生じることであろう。しかし、食文化には国や地域の風土や歴史が刻み込まれている。あくまでも個性的ではある。言い換えれば、ある時点で認められる乳製品の消費形態の差異は、どこかに先頭ランナーがいて、それを追うかのように序列が存在するといったたぐいの差異ではない。変化の経路自体が個性的なのである。

乳製品摂取の習慣はまさに地球のあらゆる地域に及んでいる。空白地帯へのアプローチの努力も積み重ねられるに違いない。乳製品に関しては、文字どおり世界中の関心を寄せる参加者による国際会議が成立する。しかも、全世界からの参加を得た会議であると同時に、酪農や乳業や乳製品消費には国や地域の個性が生きている。国の個性を前提とする交流、つまり言葉の真の意味でのインター・ナショナルな交流が可能な領域、これが酪農・乳業であると言ってよい。この点も、今回のサミットへの参加を通じて実感できた認識のひとつであった。